

乳房の美容医療

吉村浩太郎 ■ 東京大学医学部形成外科 講師

時代の急激な変化と美容医療

私ども東京大学では、教室の名前は形成外科というのですが、病院の診療科の名前は12年前に形成外科・美容外科ということになりました。実は私が医者になった頃、最初に形成外科の医局に入局した頃は、美容医療、美容外科というものは、医者やるものではない、やってはならないというふうに教わりました。ただ、もう25年経ち、時代が変わるうちに、今は、専門医制度がどの科にもあるわけですが、形成外科の専門医をもらうために学ばなければいけない10の必須項目の一つが美容になっているというぐらいの急激な時代変化があります。

どうして東大病院で美容医療をやるのかという理由としては、基本的にはニーズが増えて無視できなくなったというのが意味唯一の理由です。結局、ニーズが増えるとそれだけ多くの医療が世の中で行われます。世の中で行われると、それに対して医育機関・教育機関・研究機関が積極的な取り組みをしないと、医療の質が落ちたままの状態の社会を作り、そういう質の高い医療を提供する医師を育てる教育機関がない、医療の質を高くするための研究機関がないという状態が続くということになります。私どもも12年前から、それだけの社会的意義があると情勢変化を受けて、美容を標榜して研究だけでなく治療も行っています。

変身願望と若返り願望

美容医療には大きく分けて2つありまして、1つは“変える医療”。いわゆる生まれながらにして自分の外貌に関して遺伝的に劣等感を持つ。頭がいい悪いとかいろんなものが人間、個人差があるわけで、その中で生まれながらにして容貌に関して遺伝的に自分はいやだと思う方々が、それを変える、変身願望と言ったりしますが、それを満たすための医療です。それは若い人に多いです。もう一つは、別に変身したいわけではなくて、加齢による自分の変化がいやだ。今の60歳の自分の見た目はいやだ。30歳、40歳の頃の自分の見た目になりたい。別に他人になりたいわけではなくて、元に戻す医療と言いますか、若返り医療とか言ったりするのですが、“変える美容”と“戻す美容”の2種類があります。特に自分が親からもらった遺伝的な特徴を変える場合に、確かにやましいと思う方がいらしたり、そういう批判があったりということはあるかもしれませんが、戻す場合にはそういう抵抗が少ないということで、若返り医療は最近是非常に多く行われてどんどん伸びています。もちろん変えるほうの医療もたくさん行われているのは事実ですが、我々もそれはニーズがある限り積極的に取り組んでいく、質の高い医療を目指して研究をしていくというスタンスです。

そういう中で、本日は“乳房”に関して、実際にどういう愁訴があって、治療法があるのかをお話したいと思います。これは非常に特徴がありまして、人種によって、文化によっても、考え方、感覚もかなり違い、遺伝的にも違います。それから先ほどいろんな情報を教えていただきまして、私も非常に勉強になったのですが、あくまで医療サイドから見た情報というものを少しお話したいと思います。医療サイドから見たというのは、要するに我々は

普通の人をあまり見てないわけです。病院に来る人、美容医療を受けたい人ばかりを見えています。我々のところに来る人は皆、美容医療を受けたくて来るか、受けてトラブルで来るか、そういう美容医療に関わっている集団、そればかりを毎日診ているということです。

乳房の大きさ、形に関する愁訴は、日本人の場合はほとんどが小さいということであり、これは変身願望という意味でもあるし、一方では加齢によってちょっと小さくなってしぼんだから、というのがあります。東大病院にはどちらかというと加齢に伴う下垂などで来られる方が多く、妊娠、出産を経て、だんだんやせてきて、下がってきてみすぼらしくなる、こいうのを直したいと来られます。

一般的に若い方はちっちゃいということがコンプレックスになって、それを大きくしたいと来院されます。反対に「大きいものを小さくしたい」、これは特に西欧社会では非常に多いニーズです。アメリカも南米もヨーロッパも「大きくて困る、だから小さくしたい」。大きい人の場合、特に同時に重力で伸びてきますので、下垂も伴うことがほとんどなわけですが、こいういったものが肩凝りなどさまざまな神経症状をもたらす、生活上も問題になるということがあります。

ほかに、これは美容と一線を画す領域になってきますが、こちらのほうはモノによっては保険がきくものですが、乳がんの術後で、なくなったから造りたい。もしくは先天的に欠損していたり、胸の筋肉がなかったり、乳腺の発達が悪かったり、胸郭自体の変形があったり、鳩胸とか漏斗胸と言いまして、へこんでたり、逆に飛び出していたり、いろんな先天的な疾患と言いますか奇形があります。そういうことで治したいという方ももちろんいらっしゃいますし、美容医療によるトラブルで、「これは大変」ということで治したいという患者さんもたくさんいらっしゃいます。

乳がんに関して言いますと、我々の国において食事が西洋化していることによって乳がんがどんどん増えています。逆に胃がんはどんどん減っています。女性では完全に逆転して今は乳がんが女性においては一番多いがんになっており、大体十七、八人に一人の女性は一生のうちどこかで乳がんになるというのが日本人の現状です。アメリカでは七、八人に一人は必ずなるという状況です。

この時代による違いは何かというと、遺伝的な違いプラス、今は食事の影響が非常に強いということがわかっていまして、食事の影響で胃がんが減ったり乳がんが増えたり肺がんが増えたりしているということで、それには我が国の食事の西洋化の影響が露骨に出ているということです。アジア人はもともと西洋人に比べると非常に低い確率、アメリカから比べると3分の1ぐらいしかならないわけですが、それでも日本はそういう食事の変化で非常に増えてきているのが現状で、このままおそろくまだまだ増え続けるだろうと考えられます。乳房と言っても、単純にバストのマウンドだけの話ではなく、実際に来られる方の中には、乳頭や乳輪、乳頭であれば大きいのがいやだとか、乳頭がだんだん伸びてそれがおじぎしているように下垂していたり、中にはつぶれて出てこないとか、そういうものもあったり、乳輪の場合は大きさか、色が黒いか、こいういったものが愁訴になっています。「大きいのがいやだから小さくしたい」、もしくは「この黒い色がいやだ。だから色を薄くしたい」、こいう要望が実際はかなりあります。

これは男性で、女性化乳房というものが白人社会では非常に多いです。白人社会では男性が受ける美容手術の4番目ぐらいのところに、この女性化乳房の手術があります。逆に日本人男性では非常に少ない。なぜ少ないかというと、アジア人は男性ホルモンが西洋人に比べると非常に少ないのです。西洋人は男性ホルモンが非常に多い。実は男性ホルモンは多すぎるとある酵素の働きによって女性ホルモンに変わります。ですから、こいう人たちは男性ホルモンも高いし、女性ホルモンも高い状態になってしまいます。こいうすると乳房が

女性化してしまうという副作用が出てきます。男性なのに乳腺が大きくなったり、乳房のまわりに脂肪がついてきたりします。そういうものはやはり男性のコンプレックスになったりして、それを美容的に治したいという人が非常にたくさんいらっしゃいます。一方、日本人は男性ホルモンが低い。アジア人自体がただでさえ低いんですけども、アジア人の中でも最も低い部類です。だから、日本人男性でこういう女性化乳房の人は非常に少ないということなのです。

豊胸術の変遷

実際に豊胸術を行う場合、ほとんどが人工物です。99%人工物で行う。シリコンのバッグインプラント、生理食塩水の入ったバッグであるとか、ハイドロジェル、いろんな種類のものがこれまでも出てきて、バッグの表面の種類も色々あるわけですが、昔はパラフィンであるとか、蠟みたいなものですね、シリコンのジェルとか、いろんな注射もありましたが、人工物の注射が非常に悲惨な結果を招いていました。一時期のインプラントも実際には色々副作用がありまして、そのせいでアメリカのダウコーニングという10本の指に入るような巨大企業が訴訟で倒産するということが90年代に起こり、アメリカでは一斉にそのシリコンインプラントが禁止になりました。今はアメリカもようやく新世代のシリコンのインプラントを5年ほど前から認めるようになってきて、その安全性が再確認されてきているというところなのです。

インプラントは通常は腋から入れます。日本の場合はほとんどが腋から入れ、中には乳輪を切って入れる、もしくは乳輪の下の乳房下溝を切って入れるというような手術のやり方もあります。いずれにしても傷が目立ちますので、ある程度の大きさまでであれば腋から簡単に入りますので、ここを使う場合が日本人の場合は多い。ただ、西洋人はかなり大きなインプラントを入れますので、下のほうから入れたりします。

最近の人工乳房は、非常に安全性重視になっており、昔のシリコンジェルと言われた、非常にソフトでやわらかい水飴のようにドロッと流れてくるようなものは、今はほとんど姿を消しています。実際、このインプラントを例えば包丁で二つに切ったときに、カマンベールチーズみたいな感じで、中はやわらかくてネトネトしていますが、切っても全然流れてきません。昔は切ただけでドロッと水飴のように流れてくるようなものでした。今のものはコヒーシブシリコンとかソフトコヒーシブシリコンと言いますが、ちょっと固くなって昔より触り心地は悪くなっているのですが、その分安全性が高くなったということでもあります。

多様化するニーズに応える最新のインプラント

インプラントには、いろんな形のものがありまして、普通に丸いやつものもありますが、アナトミカルタイプと言って、より自然な形に近づけようということで、横から見るとちょっと釣鐘型になっているというようなインプラントが最近では主流になってきています。人工物ですから必ず異物反応を起こして、まわりにカプセルというのができるのですが、それがだんだん小さくなって変形したり、移動したりして、それがいろんなトラブルのもとになるわけです。

人工乳房というのは今でもいろんな改良がなされていますが、いまだに一生物ではありません。車みたいに5年なり10年なりで買い換えて入れ替えていくものだという認識です。そのへんが世の中で誤解があると感じるところはあります。いろんな大きさのもの、高さのものが、人それぞれのサイズや希望にあわせて実際には存在しており、最近では、さらに年配向けにあえてちょっと下垂した形を作るような新しいインプラントも出てきていて、こういったものは上のほうが決して盛り上がらないように、下だけが盛り上がるような感じで、すこしずんぐりしたような形

のものになっています。それが二重構造になっていて、一方に固いジェル、もう一方に軟らかいジェルという形で、触り心地も少しよくなっているものが出てきております。

日々そのようなものは進歩しているわけですが、例えばこのような胸を見ていただくと、決して見た目がよくないと思われるでしょう。実際見た目がよくないわけですが。というのは、これは全部人工物ですから、このようにカプセル拘縮を起こします。実際、入れて大きくなったはいいいけど、拘縮を起こすとだんだん底面が小さくなってボールみたいになってくるわけです。これはまさしく異物反応の結果で、こうなるとやはり「入れ替えたい、また新しくしたい」となります。最初がこれぐらいでも、だんだんこういうふうに底が収縮してきたりするところが人工乳房の限界であったり、入れる場所によって重さでだんだん下がってきて、大きさは変わらないけど重しで皮膚が伸びてくるというようなことが起こったり、最初は適当な位置にあったけれど、だんだん上にずり上がって移動してきたりというようなことが起こったりして、それをまた手直したりするわけです。

一見普通に見えるかもしれませんが、専門家から見ると、すぐにどれに人工物が入っている胸か入っていない胸かがわかります。というのは、皮膚の張り方、あとは大体乳頭から上半分の形で人工乳房かどうか見分けがつかず。資料の中では、この方とこの方とこの方は入っていませんが、残りの方は皆さん人工物が入っている胸になります。要するに上部がこういうふうにとちょっと盛り上がっている胸は、自然には実際には存在しません。ですから、そういう形で、触らなくても見ただけでこれは人工乳房が入っているという見分けがつかず。例えばこの胸も、下垂していますが、上部のこういう上がり方は基本的に自然にはありえないわけです。

美容手術における不動のNo1は豊胸術

人工乳房の後遺症ですが、このようにバッグが露出してくると傷跡が残って大変なことになるわけです。穴があいてしまっている状態です。この別の形はダブルバブルと言うんですが、拘縮が起ってだんだん変形します。昔のタイプのシリコンバッグではバッグが破損して中のシリコンがドロッと流れて漏れてきたり、それでいろんな炎症を起こすということがありました。

ところが、バストに対する需要は非常に大きい。実は、これはアメリカの統計ですが、メスを使う美容手術で一番多いのは豊胸術です。昔は脂肪吸引のほうが多かったのですが、今は脂肪吸引を抜いて不動のNO.1が豊胸術です。この豊胸術はアメリカで年間30万件以上、ということは1日千人ぐらいの人がインプラントを入れています。毎日千人ですからすごい数です。実際、世界的に見ると、この5倍ぐらいの数字で、昔はアメリカの数字の大体3倍が世界の数字だったんですけど、いろんな発展途上国から何から非常に増えてしまったので、今はアメリカの数字の5倍ぐらいが世界の数字です。この数字も、10年前から比較しますと豊胸術自体も増えていて、年間の施行数で一番多い8つの中に、さらに胸に関して、胸を小さくする手術と、胸をつり上げる、下垂を直す手術、この2種類も入っています。ですから、メスを使う美容手術の中でもバストに関する関心がいかに強いかがおわかりいただけるのではないかと思います。

日本の場合、美容医療においてヒアルロンの注射というのが数年前から行われています。これは局所麻酔で豊胸注射を打ってすぐに帰れますというやつで、ほかの国ではあまり行われていません。これに対する消費量としては今のところ日本が多い。おそらくそこにはメスを嫌う日本人の特徴があるのですが、このヒアルロン酸というのは、永久のものではなく、基本的には自然になくなっていくものです。ですが、けっこう費用もかかります。そんな一時的なものなのに、日本人は高いお金を払う。プチ整形をはじめ、この15年間でいろいろな施術

法が出てきていますが、非常に一時的な効果しかありません。一時的と言っても1日2日ではありませんが、数カ月の治療効果しかなかったり、1年の効果しかなかったりといったものです。そういったものはおそらく評価が低く、世界的には考えられたような治療が、なぜか日本では広まってしまうという傾向があります。

というのは、日本人というのは、怖くない、侵襲がない、メスを入れないということが、非常に重要な要素になっているわけです。そこを高く評価するのが日本人の少し保守的な特徴といえます。

下垂に関しても、これはもちろん圧倒的にほかの国の方が多くはすけれども、下垂はさすがに日本人もいます。というのは、下垂は基本的に加齢に伴って進むわけですが、妊娠・出産で一回伸びますから、特に月経周期で大きさの変動の激しい人は必ず下垂になりますので、治したいという方は、すでに30代後半、40代からいらっしゃると思います。

よりナチュラルにより美しくを追求するニーズ

最近はどういった人工物の悪いところを直すと言いますか、脂肪注入という方法があります。アジア人はそんなに太っている方はいませんが、欧米にはすごく太っている方がいて、肥満だらけです。お腹は減らしたい、足は細くしたい、バストは大きくしたい、ヒップはとがらせたい。そういうニーズが非常にあり、脂肪を取ってバストに入れる、もしくはヒップに入れる、お顔に入れる、という施術です。そういう中で、細胞を取って入れるような新しい治療なども行われてきています。

この人は26歳の女性で、片方の乳房が先天的に小さいというかわいそうな病気の方ですが、片方に100ccぐらい、もう片方に300ccぐらい入れて、同じぐらいの大きさにします。しかもすべて注射で終わってしまいますので、傷跡も何もありません。そういう医療も出てきています。人工物であれば、例えば変形したり、見るからにわかる形があるわけですが、脂肪ですと軟らかいし、触ってもわからなければ、見てもわからない。ただ、人工物のように300cc入れれば300cc大きくなるとか、そういう手品みたいなことはできないわけですが、100ccとか150ccぐらいであれば、何とか一回の手術でつけることができます。

こういったものは、例えば1年後の結果が2年3年4年5年たっても基本的には変わりません。自分自身の脂肪になっています。もちろんこれは10年20年たてばまた下がってきます。そういった加齢変化は当たり前のように起こるわけですが、中には人工乳房で懲り懲りという人が、人工乳房を抜いてペチャンコになって下がってしまうので、それはいやだと、そういうことをしたいという方もいらっしゃいます。こういった治療が最近「ウォール・ストリート・ジャーナル」とか、いろいろなマスコミでも報道されています。

これは陥没乳頭と言って、先天的なものです。中には陥没乳頭ではないのに、ふだん陥没しているからと言って来る人もいますが、先天的な方は本当に刺激をしても出てこないという乳管の拘縮がある人です。そういった方は手術を受けて治療します。この場合装具をしばらくつけたりもします。

また、乳輪の色素沈着、色が黒いのがいやだという方がいます。実は私も最初にやり始めたときは、需要がそんなにあるとは思いませんでした。東大病院では自家調合でこういった薬を作って、これを綿棒で毎日朝晩せせと塗ってもらいます。そういう塗り薬で色を落としていく治療ですが、この治療はあるクリニックが広告をしたところ、ものすごく患者さんが来て、一日中乳輪の色抜きの治療をする患者さんが来るぐらい、実は潜在的には需要が大きいんです。3年ほど前に芥川賞を取った「乳と卵」という小説があるのですが、その小説の中でもこの治療、トレチとハイドロという名前で行う話が出てきます。

例えばレーザーをすると本当にこれはやけどになってしまい、白い抜けた傷跡になります。脱色素と言うのですが、傷跡になると、これを治してくださいと言われても、もうどうしようもないという悲惨なことになり、中には、それで色が薄くなるんじゃないかって、白色のアートメイクとか刺青をした患者さんがいて、そうすると我々のところに来てどうしようもないわけです。

乳輪以外にもデコルテとかそういうところも、やはり露出するので関心が非常に高まっています。実はこういう部分は、我々アジア人の場合、例えば炎症後色素沈着と言いますが、白人ではあまりないのですが、炎症を起こしたあとがシミになってしまいます。そういうのが有色人種である我々のどうしても避けられない特徴でして、例えば顔に炎症後色素沈着が出ても、顔は表皮のターンオーバーで新陳代謝が早いので、2〜3カ月でなくなる人が多いんですけれども、ボディとか足とかに炎症が起こったあとは、なかなかその炎症後色素沈着が取れないで残ってしまい、取りたいという患者さんもけっこういらっしゃいます。

新技術同士を組み合わせた治療法も

10年ぐらい前にアメリカのロジャー・クローリーという形成外科医がアイデアを出して、BRAVAという、陰圧をかけておっぱいをふくらますという器具を作ったんです。「これだけで豊胸ができます」という感じで、実際にはこの道具をバストに当てて、持続吸引する電動の簡単なポンプがついていて、それを寝ているあいだ装着します。起きたらはずして仕事に行く。帰って寝るときにまたつけるというような器具で、これがはやりそうになったんですが、はやらなかったのは、永久的な効果がなかったんです。確かに一時的にちょっとおくんだり大きくなったりするような効果があって、それはそれで期待もされたんです。これは単独ではなかなかうまくいかないんですが、これを使って脂肪移植をすることで、今までできなかったような効果が乳房再建とかで得られることが最近明らかになってきました。特に乳がんの再建では、これを使った医療が最近ホットピックになっております。

どうしても乳がんの患者さんは、放射線を浴びていたり、組織が固かったり、血行が悪かったり、傷跡があってそれが肋骨に癒着してたり、いろんな問題があってなかなかうまくいかないわけです。そういったものを先ほどの機械と脂肪移植を併用することによって、数回の治療によって非常に劇的な効果が得られます。ここには人工物は入っていないわけです。

国によっても関心が異なる美容ニーズ

豊胸術、これはもちろんその国々の方々の基本的、平均的なバストサイズがあると思うんですが、もちろん東洋人よりは西洋人のほうが基本的に大きい。南米人も大きい。関心も全然違います。例えば日本の美容外科学会に行くと、7〜8割のテーマは顔に関する話です。ところが南米の美容外科学会に行きますと7〜8割はボディの話です。関心が国によって文化によって全く異なっています。

向こうで大事なのはやはりバストが出ていることで、ヒップが出ていることで、ウエストが細いことなわけです。それが、女性のセクスイメージとして重要だということになっています。そのへんは感覚がかなり日本とは違うところがありまして、最近でこそ日本でも200cc、240ccぐらいのインプラントを入れるようになったんですが、我々が最初に医者になった頃は、100ccでも入れたら恥ずかしいみたいな感覚だったんです。200ccなんか入れたらもうとても恥ずかしくてというぐらいの劇的な変化があるわけですが、今は皆さん当然食事も変わって、若い方のバストサイズも20年前とは当然違うわけです。ですから、日本でももっともっと大きいものを求める傾向があります。

乳房再建に関しては、再建する率はかなり国によって違いまして、日本はわずかにまだ5%、乳がんの方で再建する人ってわずか20人に1人ぐらいしかいない。それぐらいお粗末な状況であるのが現状で、それにはいろいろな理由が考えられますが、一つには人工物の治療に対し、国によっては保険がきくんですが、日本では保険がききません。その分消極的になるということもありますし、もちろん乳房に関する関心の高さが、国によって、文化によって違うという理由もあると思います。

健康保険がきくかきかないかということですが、例えばアメリカとかイタリアとか、こういった欧米諸国では乳房再建は基本的に全部保険がききます。ところがここでご覧いただくようにアジアではほとんどきかない。どの国もきかない。これぐらい全く感覚がアジアと欧米諸国で違います。

要するにアジアの国々では、文化的にか国民性か、その人にとって乳房再建が必要だと思われていないわけです。少なくとも税金を使ってやるほどのことじゃないだろうという見方をされているということです。ところが、欧米、南米もそうですが、保険がきくのが当たり前。逆に向こうでは乳房を小さくする手術にも保険がきく。国によって違うんですが、特に300グラム以上を片側から取る場合は重症例とみなされて、それは保険がきくようになっている国が多いです。もちろん日本ではこういった300グラムも片方から取るような重症例はほとんどないのですが、日本でももしかしたら今後、増えればそういうことはあるかもしれません。もちろん美容面だけではなく、神経症状があって生活上困るところがあったりします。香港では、乳房再建には保険がきかないんですが、装具、ブラとか専用の乳がん術後のエピテーゼという、作り物のバスト、こういったものは保険適用になっています。そういったものはアジアの国々でも認められてもいいのではないかと思います。

アジアの国々の中でも、非常に国民性の違いがありまして、例えば韓国では非常に美容手術に対して積極的です。半分以上の女性が受けると言ってもおかしくない。誕生日のプレゼントが美容手術であるというぐらい、誰かれかまわず皆さん積極的に、糊でもテープでもなく手術を受けるのが韓国です。韓国は、人口は日本の半分以上、GNPも半分以上ですけども、美容医療のマーケットは日本とほぼ同じぐらいで、美容外科の医者の数もほぼ日本と同じぐらいいます。ですから2倍ちょっとの割合で受けているということです。中国も特に上海とかそういう発展しているところは急激に今増えてきています。日本と香港がいわゆるコンサバな代表例で、香港と日本は非常にメスを嫌う、手術を嫌う。一時的な効果でも注射がいい、安心できる。高い金がかかってもかまわないというような感覚がどちらかというところあります。

乳房をとりまくさまざまな美容術

乳房にはもちろん加齢変化があります。加齢変化もあれば個人差もかなり大きいのは、ある意味女性ホルモンのせいで、乳腺はどんどん発達しますし、脂肪もたまってきます。男性ホルモンの多い人は、毛深かったり、皮脂腺が発達したり、皮膚がちょっと厚かったりします。ホルモンの出る人は月経周期で大きく胸が張ったり、またちっちゃくしぼんだり、その変化が非常に激しい人と激しくない人がおられます。ですから、そういういろんな要素、特にホルモンの要素によって、女性のバストの大きさ、皮膚の伸び方とか下垂の仕方とか、が全然違ってきます。当然それは妊娠を経験した人と経験していない人ではまた全然違ってくるということになります。

加齢変化は誰でも来るわけで、やがて女性ホルモンが出なくなれば乳腺は萎縮していきまして、脂肪の支持組織も脆弱化して垂れてきます。横向きに支えきれないわけです。軟部組織、脂肪や筋肉も最後はなくなってきますし、本当に皮だけが下がっている状態で、皮膚もだんだんペラペラに薄くなってきます。このような共通し

た変化と、個人差の変化がある。

特にホルモンという意味では遺伝的な違いが皆さんの個人差に関わってきます。医療ではない分野でいろんな取り組みを皆さんなさっていて、うまくいかない、効果がないという場合に、結局医療を受けに患者さんは来られるわけですが、実はその前に皆さんさんざんいろんなことをやられてこられているわけです。ネットで通販を調べると、育乳のガムであるとか、ダンスであるとか、いろんなものが氾濫しています。どこまで効果があるのかわかりません。もちろんパッドとかヌーブラとか、そういった底上げするものは服を着た上では形を出せるようになるわけです。中にはクリームとか、いわゆるエステでやっているような高周波であるとか、美容器、そういったものはどちらかというと皮膚の状態を良くするとか。エステでもこれはやっていますけど、マッサージとかバキュームとか、こういったものは一時的に水の位置を変えて、一見、帰るときにはちょっと大きく見えるとか、形がよく見えるとかいうのはよくあります。

フェイシャルエステでも、右と左がマッサージした側としてない側で違うというのは、例えば我々寝ているとき、水の位置は必ず重力で変わっていきますので、例えば起きたばかりの顔は横向きに重力がかかった状態で長いときの顔で、起きてから数時間たったときの顔とはもちろん全く水の位置が違うので、顔の形も全然違うわけです。ですから、そういう意味で水の位置を一時的にマッサージで変えることは、もちろん可能です。ただ、それは数時間しかもたないものであるのも事実です。

もちろん矯正下着とかテープとか、こういったものは重力による負荷をやわらげますので、長い目で見ると、重力による負荷を防止し続けることによって皮膚の伸展や菲薄化、脂肪の菲薄化を防げます。確かに外的な機械的な力は非常に影響が大きく、それが毎日となるとさすがにかなり違ってきます。

サプリメントとか外用剤とか、このへんはエストロゲン類似物質であるとかをうたったり、漢方であったり、色々ありますが、実際エストロゲンを投与することでどれぐらい効果があるかは本当にわかりません。もちろん女性ホルモンが影響しているのは間違いないのですが、それが本当に投与するほどのものなのか、また、例えば経口避妊薬を使っている人と使っていない人の統計があるとか。バスのそういう資料は見たことがありません。そういうのがあると、少しヒントになるかと思うんですが、例えば経口避妊薬を使うことによってバストが大きくなるかとか、そういったものは、本当にエストロゲンの出ていない人だとあるかもしれませんが、通常の人だとそうはないかなと思います。

あとは筋トレですね。筋肉を大きくする。日本では筋トレはバストのためにする人が多いと聞くのですが、海外の形成外科医に言わせると、海外ではあまり聞かない、それはちょっとおかしいのではないかという意見も多いです。というのは、実際大きくなる場所が違うんです。筋トレで鍛えられるのは大胸筋でして、いわゆる乳腺の場所とはちょっとずれています。ですから、ムキムキマンみたいなバストにはなれるけれど、決して豊胸にはならないというのが、医学的な見地で、場所も違えば層も違うという見方が実際にはあります。

あとはいろいろな価値観で、人によって意見が違うのですが、同じ大きさのバストをしていても、一人は乳腺組織が非常に大きくて脂肪がないバスト、もう一人は乳腺組織は小さくて脂肪が非常に多いバストをしています。どちらがいいですかという場合に、寝たときには乳腺組織が多い人のほうが高く見えます。固いわけです。白い部分、脂肪はやわらかくて、この乳腺組織は固いわけです。ですから、固い組織がいっぱい占めていると寝たときに低くなりやすい。流れにくい。ただ、触ったときにこれは固い。脂肪が多いと触ったときに非常にやわらかいし、寝たときも立ったときも姿勢によって微妙に動いてくれる。それを好む好まないは別にして、通常こちらの軟

らかいほうがいいのかという人が私が聞いた範囲では多いです。軟らかいのか固いのがいいのか、崩れるほうがいいのか崩れないバストがいいのか。一般的に人工物をよく知っている人は、人工物は固くて崩れないので、軟らかくて崩れるほうがナチュラルな印象が強いというのが一般的な形成外科医、美容外科医の感覚です。

もちろん女性と男性によってもかなり価値観が違いますし、女性の場合どちらかという質感ではなくて形態を重視する傾向が強いのではないかという意見が多く見られました。女性は横になったときも起きたときも、バストの高さや形態のほうに関心が高く、触ったときの感じには意識が低いのではないか。中には女性の意見で、性交渉が現在進行形で多い人ほど質感に対する関心が高い。要するに男性的関心に通じているから、そうではないかというような意見がありました。

個人の生活と美容医療に対する欲求レベルのさまざまな段階

さきほどから食事、食事と西洋と東洋の違いで指摘していますが、例えば東洋人で、日系二世がほかの国に行くと、やはりバストが大きくなったり脂肪がタポタポについたりするんです。ですから、遺伝的な要素ではなく、食事の要素がかなり強いというのは大体認知されています。

患者が美容医療にどこまでのレベルを求めるかと言いますと、これは人によってすごく違います。ある人は、「いいんです。とにかく服の上から形がよければいい。服が着られればいい。着たい服が着られる」というのが、我々から見ると一番低いレベルです。もう少し進んでいくと「水着が着れないと困る」。そうするとかなり露出するので、周囲の形態やデコルテなんかも重要になってくるレベルです。さらにいくと、温泉に入る形態と外観のレベルというと、これは同性には見せるバストです。さらに異性に見せる可能性があります。でも形態であって質感までは求めない。最後は異性に触らせる質感までの質を求めるというレベル。いろんな段階のレベルが患者さんによってあります。その欲求によって、患者さんが選択することも違ってくることになります。

我々が最近見ていると、女性は男性化しているように非常に感じます。ダイエットブーム、エクササイズブーム、いろんなブームがございます。例えばダイエット、エクササイズ、また仕事上のストレス、プライベートのストレス、こういったものがどうしても男性ホルモンを高くする。そういったものが生理不順を呼んで、無月経や吹き出物を呼ぶ。脂肪を減らして筋肉をつけて基礎代謝が増えてさらに男性化していき、逆にエストロゲンを減らしていくというような悪循環というか、これが悪循環なのかいい循環なのかはもちろん人によって違うと思いますが、そういうことが起こっています。特に日本の場合、海外の人たちから見ると非常に日本人女性はやせています。やせている女性がさらに海外よりもダイエットやエクササイズに熱心であるというような点が、奇異に写るところもあるようです。

過去20年間の乳房の医療の変化を考えると、もちろん関心や数が増えました。サイズが大きくなりました。また皮膚に関するニーズが増え、さらに、特に若い人ではなくて30代後半、離婚歴とか夫婦関係から来るものとか、さまざまな需要が出ています。実際には40代の需要がすごく多いです。また50代60代でもけっこういらっやいます。ですから、近年は高齢者のバストに対する需要が増えたといえると思います。おそらく、そういう関心がある世代が年を取って、高関心世代がずれてきたというのはもちろんあるとは思いますが、下垂など加齢変化に対する関心が高くなったということもあるかと思っています。

これからの美容医療について

これは今年のアメリカ美容外科学会の予想の10項目で、若返り治療が増えるのでは、と予想されています。経済がアメリカも少しよくなっています。リーマンショックで控えていた外科手術が増えるのでは、とか、注射治療がさらに増えるのでは、とか。つまり日本だけでなく、結局海外でも注射治療の需要が増えてきているわけです。向こうでは超肥満から減量する人たちがいて、皮膚がペラペラになってしまう人がいますので、そういった人たちの治療が増えるだろうとか、ベビーブーマーがそろそろ乳房インプラントを入れ替える頃だ、それでつり上げをしたりするのではないかと、超安売りの不良医療の被害がますます増えるのではないかと、脂肪吸引以外の低侵襲の肥満治療が、効果は怪しいけれども増えるのではないかと。一方では科学的根拠に基づく低侵襲医療が新たに導入されるとか、あとはお尻の美容に関心が増えてきているので、お尻に対しての需要が増えるとか。または事実と誇張を慎重に見分けるような傾向が強くなるだろうとか。

実際いろんなヒップパッドというものがありますが、バストパッドほど日本では普及していません。ところが、海外ではお尻用のインプラントを入れる人がたくさんいるぐらい関心が高い。特に南米の学会では高いです。それぐらいお尻もセックスアピールの非常に重要な要素であって、これを入れるだけでパンツがかっこよくなって足が長く見えるわけです。そういう服を着たときの意味合いももちろんあるわけです。

最後に、美容医療のこれからとして、患者が医療に入ってくるといわれています。実際には、医療が患者に近づいているようなところもあるわけです。と言いますのは、低侵襲医療、いわゆるエステと医療のはざまみたいな治療が医療に取り込まれてきています。患者に譲るといいますか、効果は微妙なのですが、低侵襲施術を医療として提供し始めています。患者さんはとにかく安心して、メスを使わない医療を望んでいるということなんです。こういったいくつかの変化がこれから少しずつ出てくるかもしれない。食事の西洋化、超健康指向、男性化であったり草食化であったり、晩婚化とか少子化とか高齢化とか、いろいろなこと、世界の変化がどうしても影響してきます。